

のんた

6

山口の土地改良

vol.6

Spring 2004

21世紀の食料・環境・ふるさとを考えよう!

●巻頭特集

2003 地球環境

米米フォーラム

in 北長門

のんたNews

水田放牧で

よみがえる耕作放棄地

入選作品のご紹介

第5回 食料・環境・ふるさと

写真コンテスト

のんたエッセイ

「かぼちゃの花」

ふるさと紀行

やまぐちの伝統野菜・果樹

都市と農村の交流施設／豊田町農業公園・みのりの丘

農村へ行こう！



食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議

2003地球環境米米フォーラムin北長門
田植えフェスティバル
 5/31(土)~6/1(日)
 Rice-Planting Festival



長門市の「ルネッサながと」で開会式が行われ、各国外交官はこの会場でホストファミリーと対面しました。



二井知事も田植えに挑戦しました。



みんな、これ、なんだか分かるかな？

「山口県田んぼの学校」も米米フォーラムに参加。棚田周辺の生き物についての勉強会を実施しました。

**助け合って楽しさ倍増！
 田植え定規を使った昔ながらの
 田植えに歓声いっぱい**

春の田植えフェスティバルは、48カ国の駐日大使館の外交官とその家族95人、地元の方々と合わせて約1000人が参加して行われました。

米米フェスティバルは、農作業を体験してもらっただけでなく、開催地の生活習慣や食生活なども体験してもらおうと企画されたもので、外交官とその家族の皆さんは北浦の2市3町の一般家庭へホームステイして国際交流を深めました。

初日は台風の影響であいにくの天気となりましたが、翌朝は台風一過。澄んだ空気の中、外交官とホストファミリー、小中学生がチームを組んで、張ってある線に沿って「田植え定規」をあて、間隔に注意しながら苗を植える昔ながらの田植えに挑戦。天皇陛下が皇居内の水田で収穫された御下賜米の種もみから育てた苗や「日本晴」「マ

ンゲツモチ」の苗を植えました。

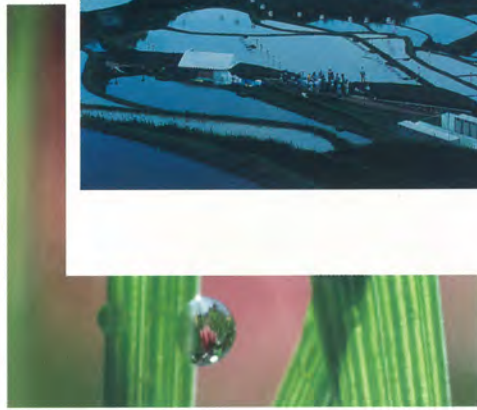
中にはスゲ笠にモンペ姿で田植えに挑んだ外交官や、慣れない田んぼに転んで泥んこになった参加者もいたようですが、それぞれに米づくりの手間とみんなで助けあう楽しさを味わったようです。

田植えコンテストも開かれ、米米グランプリはチカゴ・マラウイ大使チームが受賞。チカゴ大使はお礼のあいさつで「協力を重んじる日本文化を学ぶことができた」とコメントされました。

田植え体験後は、日置町の地域づくりセンターで地元の女性グループが作った「のっぺい汁」や「手巻き寿司」などで昼食。千畳敷では萩市見島に伝わる大風「鬼揚子」揚げを楽しむなどして交流を深め合い、秋の稲刈りフェスティバルでの再会を約束していました。



2003地球環境
米米フォーラム
 in 北長門



主会場／油谷町東後畑
 主催／地球環境平和財団・
 2003地球環境米米フォーラム in 北長門実行委員会

「日本の棚田百選」に選ばれた油谷町東後畑の雄大な棚田地帯を主会場として昨年、「2003地球環境米米フォーラム in 北長門」が開催されました。このフォーラムはこれまで石川県・北海道などで開催されており、今回で5回目。各国外交官や小中学生・一般市民など、たくさんの方が参加して行われた米米フォーラム in 北長門の様子について報告します。

「地球環境米米フォーラム」は、稲作体験を中心に「稲作・農業と地球環境、国際協力、伝統文化」について、世界各国の外交官や小中学生・一般市民など、多くの人々に体感してもらおうと、地球環境平和財団と地元実行委員会の主催で毎年開かれていたもので、今回のフォーラムには山口県土地改良事業団体連合会も実行委員会の一員として参画しています。

米米フォーラムは、田植えから稲刈りまで1年を通じて米づくりについて学べるように企画されています。今回は春の「田植えフェスティバル」が5月31日と6月1日に、秋の「稲刈りフェスティバル」が10月27日と28日に油谷町を主会場として開催されました。

そのほか8月には食の安全・安心をテーマに「とんぼ田んぼシンポジウム」が東京で開催され、12月には油谷町で収穫した種もみを次年度開催地（愛知県安城市）の代表に引き渡す「種もみ引渡し式」がやはり東京で行われ、1年間にわたる米米フォーラムの事業が終了しました。

棚田を守ろう！



油谷町には、向津具半島を中心に約600haもの一大棚田地帯が広がっており、その雄大な棚田と油谷湾とが織りなす美しい風景は「日本の棚田百選」にも選ばれています。

しかし、機械を導入しにくい棚田では近年、耕作放棄田が増え始めています。棚田には、農作物生産の役割だけでなく、水のダム・地滑り防止・水源かん養機能などのさまざまな多面的機能が、そうした面からも棚田の保全は今、社会的な関心を集めるようになってきています。そんな中、油谷町では棚田を守ろうと、平成11年から棚田ボランティア、平成14年から棚田オーナー制も始まっています。

こうした動きは県内各地で見られ、徳地町三谷でも平成14年度から棚田オーナー制度をスタート。周南市中須北でも平成14年度から棚田オーナー制度を始めます。こうした取り組みには県内外からたくさんの応募が寄せられており、棚田保全の動きは年々広まりつつあります。

Q. 自然環境や農業としての見地から、田植え・稲刈りをした油谷町の棚田の印象はいかがでしたでしょうか？

〈スリランカ〉

私はこの美しい田をきっと忘れないと思います。もう一度山口県に来たいです。また私のホストファミリーにも会いたいし、春や夏の田も見たいです。

〈スロバキア〉

観光雑誌によると、油谷町の田は日本で最も美しいところだといえます。とくに私たちは眺めに驚かされ、感動しました。農業の点から、それは人類の食料と環境の間で調和しているとてもいい例です。

〈ザンビア〉

田んぼは、よく広げられていて、水源の管理や保存も効率的に整備されていました。

〈イラン〉

私も妻も、田植えは初めてで楽しかったです。日本の家族と一緒に過ごしたことがとても楽しく、忘れられない思い出です。

〈チリ〉

日本のとても美しい景色を見ることができました。とくに棚田から見る海は印象的でした。きっと日本の中でも最も素晴らしい場所に来たのではないかと思います。

〈中国〉

田んぼは私が以前想像していた以上に驚かされました。

〈ウクライナ〉

私は生まれて初めて油谷の棚田を見ました。それは小麦畑が1000haある私の生まれた国と比較すると、農業の非常に特有なタイプです。海を背景にしているその棚田はとても印象的でした。米米フォーラムに参加することは「国際コメ年」である2004年の国連会議で報告する良い機会だったと思います。

〈フィジー共和国〉

楽しく忘れられない経験をしたこと

Q. 山口県の印象はいかがでしたでしょうか？

〈スリランカ〉

今まで40余りの県を訪問しましたが、この山口県は自然が残る最も印象的で、ほかの県以上に興味深く、山口の人々はとても幸せだと思いました。山口の人々は次世代の人々のために、間違いなく自然保護を怠りかなくてはならない。

〈ウガンダ〉

新鮮な空気や美しい景色のある、とても素晴らしい所です。そして親しみのある人柄は山口県の特徴だと思います。

Q. 山口県にもう一度来たいとお思いでしょうか？

〈ボスニア〉

もちろん！何といっても、ホストファミリーがとても親切にもてなしをしてくれました。

〈ラオス〉

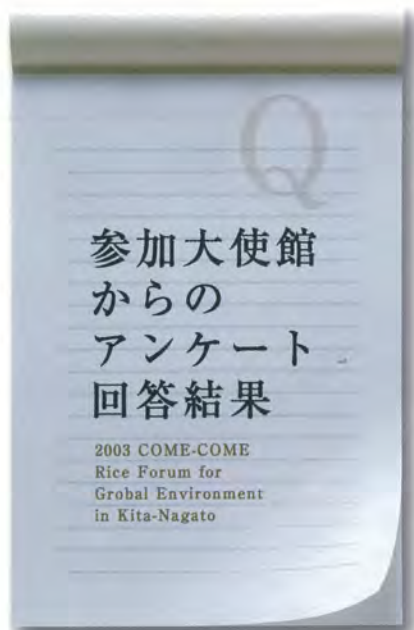
はい。私はまた山口に来たいです。なぜなら環境がとてもよいし、たくさんの友達がいるからです。

〈ロシア〉

もちろん！いうまでもなく、また山口に何度でも来たい！！海や海のある生活がとても好きなので、夏休みにまた山口を訪れたいです。

〈ギニア〉

はい。農業職に従事するものがおり、米が主食である私たちの国と日本との結束を強化・維持するため。また、農業の問題において、山口県の経験と環境の保護から学ぶべきことがあるため。



「山口県田んぼの学校」は、せんばや足踏み脱穀機を使った体験活動の指導役として活躍しました。



高円宮妃殿下久子さまも、参加者の皆さんと一緒に稲刈りに挑戦されました。



大人も子どもも外国の人も一緒になって、秋晴れの空の下、稲刈りに汗を流しました。



せんばも足踏み脱穀も大変だけど、面白いね。

2003地球環境米米フォーラムin北長門 稲刈りフェスティバル

9/27(土)~28(日)

Rice-Harvesting Festival



国境をこえて 大人も子どももみんな 分かち合った実りの笑顔



秋の稲刈りフェスティバルは、高円宮妃殿下久子さまのご臨席のもと、37カ国の駐日大使館の外交官とその家族70人と地元の皆様さん、合わせて約1000人が参加して行われました。

稲刈り体験の前日には、まず萩市で「再会式」が行われ、外交官とその家族はホストファミリーの皆さんに再会。一行は萩市内を観光し、三隅町の香月美術館を訪れた後、再びホストファミリーの出迎えを受けて各家庭へ。ホームステイ先ではおみやげを交換したり、もちつきを楽しんだりして、約4カ月ぶりの再会を喜び合いました。

翌日は6月に植えた苗がたわわに実った稲を、鎌で1株1株丁寧に刈り取って、はぜかけに。日置農業高校の高校生も先生役を務めるなどして活躍しました。

中には、これまで米米フォーラムに数回

参加した外交官もおり、慣れた手付きで稲を刈り取る姿も見られたほか、コートジボワールの5歳の小さな女の子が稲をかついで運ぶ姿もあり、ほほえましい国際色豊かな秋の実りの1日となりました。

稲刈り後は、高円宮妃殿下久子さま、大使館代表、実行委員による記念植樹を行い、記念碑も設置。最後は長門市に会場を移して昼食交流会と閉会式が行われ、郷土料理がふるまわれたほか、三隅町の児童による「ふるさと合唱」、三隅町滝坂神楽保存会による神楽も披露され、参加者の皆さんは別れのひとときを惜しみあいました。

山口県田んぼの学校も ボランティアとして活躍！



昔はみんなこうやって手作業で脱穀していたんだよ。

田植えフェスティバル

参加者 山口県田んぼの学校会員 174名

活動内容

1 稲田生き物ウォッチング

稲田やため池、水路などを散策しながら生き物を見つけたり、網で生き物を捕まえて水槽で観察したり、生物の専門指導員の指導で稲田周辺に生息する生き物について勉強会を実施しました。

2 棚田でポン

ポン菓子会場内で作って参加者に配布。食から米文化を通して、お米の良さを見直すきっかけづくりとしました。

稲刈りフェスティバル

参加者 山口県田んぼの学校会員 93名

活動内容

1 脱穀体験 昔の農機具(せんば、足踏み脱穀機)を使って稲刈り後の稲(ぎ)脱穀の体験活動を実施。一連の流れを知ってもらうため、事前に刈り取った稲をはぜ掛けし、せんば2台及び脱穀機1台を設置して使用しました。

2 棚田でポン

ポン菓子会場内で作って参加者に配布しました。

です。それは新しく美しいというだけでなく、私たちに作物の恵みを与えてくれる地域の貴重な資源でもあると思います。

〈ホンジュラス〉

風景が美しく、きれいでした。私たちは本当に楽しみました。

を感謝します。初めての他国での水田で異なる米の収穫方法を体験することができました。今後、食料を食べ尽くすだけでなく、米を育てることを通して環境保護が可能だと気付くことが増えるでしょう。

〈ミャンマー〉

油谷町の棚田はとても美しいです。それに規則的な灌漑や排水がされています。しかし、農業の部門で、また社会的な面でももっと多くの理解が必要だと思います。

〈ペルー〉

油谷町の棚田はとても素晴らしい所

年々増えている 耕作放棄地

担い手の高齢化や米の生産調整などが原因で今、全国各地で耕作放棄地が増え続けています。山口県も例外ではなく、県内の耕作放棄地は平成2年の2,664haから平成12年には3,375haへと26%も増加しています。

そもそも農村・農地には農産物を生産していく役割があるほか、国土保全・水源かん養・自然環境の保全・良好な景観・文化の伝承・地域社会の維持活性化など、人々の暮らしを守っていく上で欠かせないさまざまな多面的機能を有しています。

つまり、耕作放棄地が増えることは、雑草が繁茂して地域の景観を損ねるだけでなく、さまざまな多面的機能を失うことも意味し、土砂の流失や土地の崩壊、農作物の病害虫の発生源となる可能性など、さまざまな悪影響が懸念されます。

そうした耕作放棄地の荒廃を防ぐと共に、その活用方法の一つとして注目を集めているのが、平成元年から山口県の単独事業として始まった水田放牧事業です。油谷町・日置町・長門市などでスタートしたところ、畜産農家経営の省力化・低コスト化だけでなく、牛の「舌刈り」効果によって約20haの耕作放棄地が約2ヵ月できれいになるといった景観維持などの効果も報告されて話題に。さらにその後、設置も移動も簡単で、しかもコストの低いソーラー式などの電気牧柵が開発されたことによって、その手軽さも評判となり、畜産農家以外の人からも牛を借りて草刈りをしたいという希望が寄せられるようになったことから、県畜産試験場の牛を放牧希望地へ貸し出す制度もスタート。山口型放牧は年を追うごとに県内各地に広がっています。

水田放牧のメリット・デメリットとは？

水田放牧のメリットとしては、まず耕作放棄地に牛を放牧することによって、繁茂した雑草を牛の十分な栄養源として活用できることが挙げられます。2つめのメリットとして、草刈り作業を省力化できると共に、草を短くできることによって農地・農村の景観を改善できること。3つめとして、放牧牛は傾斜地でも移動できるので、土地を選ばないこと。4つめとして、放牧する妊娠牛は一般におとなしいため管理が容易で、力も必要としないため高齢者や女性でも飼育できるといったメリットが挙げられます。

一方、デメリットとしては、まず電気牧柵などの施設費がかかるということがあります。しかし、前述したように近年、低コ

NONTA NEWS

山口県では、全国に先駆けて平成元年から肉用牛の水田での放牧を行う事業に取り組んでいます。山口県の水田などでの放牧は「山口型放牧」と呼ばれ、耕作放棄地対策の有効活用手段の一つとして評判を呼び、全国から水田放牧のバイオニアとして注目を集めています。水田放牧にはどんな効果があるのか、ご紹介しましょう。

水田放牧で よみがえる 耕作放棄地



右写真の放牧前の様子。放牧は2頭1組で行われます。

ストの電気牧柵が登場しており、支柱やガイシを自前で調達すれば、1ha当たり約15万円ですませることもできます（※注）。2つめとして、放牧によって畦が崩れる場合もあること。これについては、予め一部分を人為的に崩して牛の通り道を作っておくことで対処できます。3つめとして、牛の糞尿への地域住民の不安が挙げられ、これについては事前に地域住民へ理解を求めることが大事だといえます。

実際に導入した事例では、農家から「予想以上にきれいになった」「機械で刈れない石垣の隙間まできれいになった」などの声が上がっているほか、当初反対した地域の人たちからも「牛がいると懐かしい」などの声もあがっているようです。

低コストの 移動式電気牧柵の導入で、 県内各地に広がる 水田放牧

水田放牧は当初、県北部での導入が中心

でしたが、近年は柳井市・東和町・周南市など県内各地に広がり、平成15年度12月現在では23市町村で実施されています。

牛が雑草を食べることによって荒地地がきれいになると共に、繁殖牛経営の省力化・低コスト化も図れる水田放牧。山口県では現在、定期的に放牧水田を移動させていく移動放牧システムとして定着を図るなど、山口県の特徴である水田を活用した放牧利用体系を「山口型放牧」として普及に努めています。

雑草が繁茂した
治水などへの悪影
源となる可能性
イノシシなどの侵

before



after





「刈り取りに急ぐ」 油谷町向津具半島
野間幹雄(萩市)

次の田んぼに稲刈りに急ぐ風景に見せられてシャッターをきりました。



「海を渡る神輿」 豊北町
藤永知己(油谷町)

二見ヶ浦の秋祭りでの漁の安全と大漁を祈る祭りの様子。船でパレードして神輿を沖から浮かして対岸まで若い者が泳いで船へ引上げる。



「冷込んだ朝」 美東町絵堂
山根秀雄(山口市)

地中より水蒸気が立上る中、一家で「ゴボウ」の収穫作業をしている所を撮ってみた。若い後継者と一緒に農作業をされている所が印象的だった。



「豊作」 山口市名田島
安武 努(宇部市)

一面収穫を待っている玉ねぎが横たわっている。そのみごとに感動してシャッターをきりました。



「やまめのつかみどり」 下関市安岡町深坂
三嶋 光(下関市)

深坂で行われた森林まつりのひとつ。雨模様で寒かったので、水に入った時は寒そうでしたが「やまめ」が入られると夢中で追っかけていました。



「定規で田植え」 油谷町東後畑
串岡妙子(下関市)

今は写真のような定規を使って田植えをする所も少なくなったと聞きます。後畑ではまだ昔ながらの定規を使っているのを時々見ます。古い道具と外国の方の田植えは本当に珍しい光景です。



「秋景」 小野田市
加藤洋子(下関市)

秋の収穫が終わり畑にそのワラが積んであり、柿も実って野菜もおいしそうに見えました。農村の素晴らしい風景に出会えました。

一般の部
Prize 佳作



「茶摘娘」 宇部市小野
亀山正生(小郡町)

夏も近づくと八十八夜...と心の中で歌いながらシャッターをきりました。



「夕暮れと子供」 長門市内
赤羽正吾(長門市)

夕暮れの田で遊ぶ子どもの後姿に心が和みました。(裏表紙の写真)



「漁火」 油谷町
池永俊昭(豊浦町)

落陽の美しい色と漁火の不思議な光が目に残っています。

Furusato
Photo
Contest



一般の部
Prize 最優秀賞

「農婦」 油谷町
河野サエ子(下関市)

棚田の畦道で、てんびんに苗を入れて田んぼにまいている農婦を撮影しました。
(表紙の写真)



一般の部
Prize 優秀賞



「朝の河口」 豊北町栗野川河口
山根秀雄(山口市)

3月まだ冷たい風の吹く早朝、決められたわずかな時間内で胸膈を履き胸まで水に浸り「あおさ」とりをする漁民の姿が逆光の中で大変印象的だった。

「棚田の笑顔」 周南市中須
内山和則(周南市)

バックの棚田が大変印象的でした。老夫婦の御苦労を思いつつ、いつまでも残していきたい風景だと思いました。



一般の部
Prize 入賞



「活性化する棚田」 油谷町東後畑
藤井國夫(下関市)

初夏、油谷町東後畑で棚田フェスティバルが開催された。永年にわたり築き上げられた伝統的な文化遺産ともいえる日本の棚田。この素晴らしい景観を次世代へ引き継ぐ事の大切さを痛感させられた。



「茶島の丘」 宇部市小野
斉藤勝美(山口市)

自然を活かしながら生産の効率化を図るべく、整備された茶島の美しさにひかれた。

やまぐちの農山漁村景観を活かした
地域づくりコンクール 一般の部
食料・環境「水・土・人・暮らし」
ふるさと写真コンテスト
山口県内の農山漁村の良さを再発見していただくとうと「水・土・人・暮らし」をテーマに、平成15年7月から12月にかけて「食料・環境・ふるさと写真コンテスト」を開催しました。県内各地から寄せられた応募総数296点のうち、農山漁村の風景や人々の暮らし、伝統文化などを撮った入賞作品20点を誌上で御紹介します。お楽しみください。



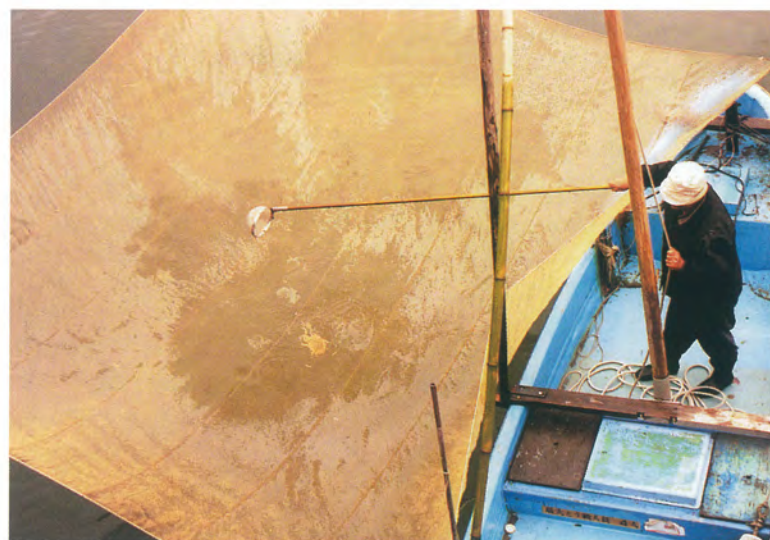
「川の恵みに生きる」 萩市藍場川
松本喜代子(萩市)

雪降る寒い朝、きれいな藍場川の水で野菜を洗って市場に出荷。手も足も感触がなくなるとのこと。農家の人の苦勞が私の心にジーンときました。

やまぐちの農山漁村景観を活かした
地域づくりコンクール 児童・生徒の部

食料・環境「水・土・人・くらし」 ふるさと写真コンテスト

児童・生徒の部
Prize
最優秀賞



【白魚漁】 萩市
住田 茜(山口市・中学2年)

初めて白魚漁を見ました。大きな網を沈めておいて、しばらくするとその網を上げて魚を取ります。最近の機械的な漁と比べ、昔ながらの漁を見ることができて勉強になりました。

Furusato
Photo
Contest



児童・生徒の部
Prize
優秀賞



【逃してあげる】 上関町室津
西本宗矢(田布施町・小学2年)

弟の明矢はつれた「ふぐ」をやさしく手でつまみ、海に逃しました。



【おつかれさま】 田布施町大波野
西本侑矢(田布施町・小学6年)

しろかきの後、お父さんと弟がトラクターを洗っていました。ずぶぬれになって大変です。おつかれさま。



【おじいちゃんの牛】

ぼくのうちのぼくじょう
峯重瑞紀(周南市・小学2年)

おじいちゃんがほうぼくしている牛です。
山の草を食べているところです。

主催/ やまぐちの農山漁村景観を活かした地域づくりコンクール実行委員会(山口県、山口県土地改良事業団体連合会、食料・環境・ふるさとを考える山口県地球会議)

後援/ 中国新聞社、山口新聞社

協賛/ 富士写真フィルム株式会社、株式会社 山口フジカラー

毎

年、カボチャの花が咲く頃になると、今でも思い出す。日本が戦いを続けていた時代である。食糧事情の最悪の時、自給自足の日々であった。成長期の8人の子どもを抱えた親はどんな思いで育ててくれたのだろう。

庭に続く空き地に植えたかぼちゃに、一つの花も無駄にならない様結実させるために、毎朝夕は花粉つけをしていた。収穫時には縁側一杯に並んだ色々な形をしたかぼちゃを子どもたちは品評した。今の様においしいかぼちゃではなく、とにかく量が一番であった。農家ではなかったが、家より少し離れた所に田があった。当時、盛況であった炭坑の影響で地盤沈下で穴があいて水が抜け、田の役目は出来なかった。そこで畑にして祖母が小麦や大豆、野菜づくりをした。

小麦が収穫されれば、挽臼でひいて小麦粉にし、ふすま(皮)も入れて団子や蒸しパンにした。町家なので農機具は鋤や鎌しかなかったと思うが、田舎の人に分けてもらったのか、せん羽や脱穀機も揃えていた。大豆は味噌作りやご飯に混ぜたり、石臼でひいてきな粉を作った。昼食用の蒸しかぼちゃにかけて食し、今考えれば大変良好な自然食料理だった。

農業体験は、女学校に入って授業の中で農業実習であった。普通校であったが、貴重な体験ができた。土おこしや畝作り、苗の植え方、間引き方、田植えなどを友だちとわいわい言いながらならった。堆肥小屋の堆肥のふわっとしたぬくもりと臭いは忘れられない。

化学肥料の代わりは専ら下肥の利用で、校内の便所より汲み取って二人でかついで畑に入れる作業は思いもしなかったことである。お陰で家での野菜作りの手伝いや、肥桶かつぎが出来たようになった。キャベツの青虫取りも箸でつまんで上手に取れた。当時の芋は量が多く出来る護国芋で、お粥に入れたり干したりして保存食にした。

また校外実習で学校林の作業に遠足気分でおしゃべりしながら歩いていく。厚狭から美祿線の湯の峠まで。それから山に入って苗木を植えて、その後、時々下草刈りに行くのだ。ある日には、帰る時に切り出している長い木を二人でかついで疲れた足を引きずって帰った。その木は後日、鋸で寸断し薪として湯沸かしに使われた。

年に1度のクラス会に集まると、勉強した話よりも農作業や山行きの話に花が咲くのである。もう、ずいぶんは大きくなっただろう。私の青春時代は勤労の数々を体験させていただき、その後の人生の糧となった。戦いも終り、農業政策も大きく変化した。長期展望に立って行われたであろう諸々のことが良い結果をもたらしたのであるか。自然を破壊しては嘆き、地産地消を推進しても自給率が満足にいかない。輸入物が満足しても、一度トラブルが起これば大騒ぎになる。日本の国は狭いと言いつつ、荒地の多いこと。農業体験者のお話に自給率の下がる仕組みを伺って、どうしたら消費者の一人として皆さんの力になれるかと。私どもは日本の国を本当に愛しているのだろうか。かぼちゃの花に寄せて思うことだ。

のんたエッセイ vol.6

かぼちゃの花

NONTA essay

前山口県消費者団体連絡協議会代表幹事

佐々木 美都喜

text by= SASAKI, Mitsuki



Yamaguchi Traditional Vegetables, Fruits



● 原産地／長門市田屋
● 現在の栽培地／萩市・三隅町・長門市

「田屋なす」は果実が普通のナスの2倍以上と大きくなる品種です。昭和初期には長門市田屋で栽培されていました。昭和50年代に萩市に種が渡って数戸の農家によって栽培が続けられてきました。大きなものは1kg近くにもなりますが、3番果になるとそれほど大きくなりません。500g以上の果実を「たまげ」ほど大きい「萩たまげなす」として販売しています。果肉が非常に柔らかく、きめこまやかで味に優れ、煮ても焼いても揚げてもよし。暑さに弱いので、6月と10月が主な出荷時期となります。



普通のなす

田屋なす

田屋なす (萩たまげなす)

「長門ゆずきち」は、古くから田万川町周辺で栽培されている、ユズのよう果汁を主に酢として利用する柑橘類です。特徴はカボスやスタチよりも早く、8月上旬から酢が搾れること。日本海沿岸で、この時期に獲れるシイラ(マンサク)の刺身に合う酢として親しまれてきました。ユズとスタチをブレンドしたような爽やかな香り、素材の風味を損なわない、強すぎない香りも魅力です。平成10年頃から長門市や豊北町などでも栽培されるようになり、現在では加工品も誕生し、その知名度は年々高まっています。

● 原産地／田万川町江崎
● 現在の栽培地／田万川町、長門市、豊北町

長門ゆずきち



「長

門ゆずきち」は、古くから田万川町周辺で栽培されている、ユズのよう果汁を主に酢として利用する柑橘類

「伝統野菜」取り組みのねらい

これからの農産物は付加価値を付けないと、有利な販売はできなくなっています。しかもそこで求められるのは、単に「美味しい」とか「安全」であることだけでなく、物語や数値です。伝統野菜は保存されてこられた人の思いがあり、語られるものです。まず、伝統野菜でこれからの売り方に取り組み、その方法が他の品目に波及することを期待しています。

(山口県農業試験場 育種開発部 部長 片川聖さん)



「白おくら」の特徴は、その名の通り、色が白いことです。しかも粘りが強く、ビタミンC含有量が多いのも魅力。さらに普通のオクラよりも硬くなるのが遅く、あくが強くないので生食に向いていることも特徴です。一説に約50年前に外国から持ち帰られたものといわれ、現在三隅町で栽培されているほか、類似したものが須佐町や徳地町などでも栽培されています。出荷時期は7月から10月。三隅町では今、栽培者を増やし、販売する取り組みが始まっています。

● 原産地／海外(保存地／三隅町)
● 現在の栽培地／三隅町など

白おくら



ふるさとい

伝統野菜・果樹

やまぐちの



● 原産地・栽培地／岩国市錦見

「岩国赤大根」は根だけでなく、葉柄や葉脈も鮮やかな赤い色をしたダイコン。でも、赤いのは表皮だけで、中はやはり白色です。形は「聖護院大根」に似た丸ダイコンで、赤い色を活かしてだいこんおろしや酢漬けなどに利用されています。昭和30年代まで岩国市内や京都方面へ出荷されていましたが、連作障害などで栽培農家が減り、錦見地区の数個の農家だけで自家消費用に栽培が続けられてきました。しかし、最近ふるさとの食材として見直され、市内の学校給食にも登場しています。

岩国赤大根



乾燥の様子

山口県には、他県では見られない特徴のある伝統野菜や果樹がたくさんあります。しかし、古くから地域で親しまれながら、いつしか作られなくなったものも少なくなく、そんな中、近年になって県農業試験場が中心となって復興へ向けた動きが広がっています。今、話題の伝統野菜や果樹を数点、ご紹介しましょう。

● 原産地・栽培地／周南市羽島

とっくり大根



珍しい「徳利」の形をした小形のダイコンで、首の部分は1センチ程度と細く、辛みの強いのが特徴です。不思議なことに羽島(旧・新南陽市)以外の地区で栽培すると、なぜか徳利形にならないとか。農業試験場では、どのように栽培すれば徳利形になるのか、研究が行われています。収穫は12月上中旬ごろ。主に沢庵漬けに加工されて、朝市や地元スーパーなどで販売され、シヤキシヤキとした歯ごたえに人気があります。

information

豊田町農業公園・みのりの丘



お問い合わせ
 山口県豊浦郡豊田町大字八道601-3
 TEL0837-66-1395 FAX0837-66-2793
 管理・運営／有限会社 豊田あくりサービス

休園日
 毎週火曜日、
 年末年始(12月28日～1月5日)

開園時間
 ・特産品販売所 9:30～16:00
 ・茶屋「竹膳」 10:00～16:00
 10:00～15:00

交通
 中国自動車道小川ICあるいは美祢ICより車で35分

豊田町ホームページ
<http://www.town.toyota.yamaguchi.jp/>



- 概要
- 食堂「茶屋 竹膳」
 - 特産品販売所
 - 温室ハウス
 - 果樹園
 - 精米製粉施設
 - サンライスセンター (もみ乾燥調整施設)
 - グリーンファクトリー (堆肥センター)
 - 農産物集出荷場
 - 総合管理棟
 - 加工体験施設
 - 多目的利用施設
 - 豊田肉用牛繁殖肥育センター

農村へ行こう! Let's Go! Minori no oka



食堂「茶屋 竹膳」では、豊田町内で採れたそば・大豆・野菜を活用した郷土料理がいただけます。オススメは手打ちの「ぶっかけそば」と町内産大豆100%使用の「手作り豆腐」。お隣の特産品販売所では、公園や農家で収穫された新鮮野菜をはじめ、さまざまな特産品を販売。季節のくだものを使ったシャーベット、サラダホウレンソウなどを使ったアイスクリームも販売しています。



農村へ行こう!

都市と農村の交流施設 | 豊田町農業公園・みのりの丘



交流拠点としては、地元の食材を使った地元の人々の指導によるそば打ちや豆腐づくり、味噌づくり体験などが人気を博しています。中には「おいしかったから」と再度訪れる人や、体験後に豆腐づくりセットを購入して帰る人もいます。

農作業体験では播種から刈り取りまで体験できる「市民農園」があるほか、温室ハウスでのもぎとり体験や果樹園でのもぎとりなど、四季を通じてさまざまな実体験が楽しめることが好評で、県外から訪れる人も少なくないそうです。

宿泊施設としてログハウスの建設も予定されていて、実現すれば滞在型の楽しみも増えてきます。農業の魅力や役割をアピールしていくグリーンツーリズムの拠点として、みのりの丘の今後の展開が期待されます。

自分の手で作って食べて
 おいしい農業体験が
 子どもにも大人にも人気!

を採用した「もみ乾燥調整施設」があることや、そのほか、町内の酪農家などからの牛糞で堆肥を製造する地域資源循環活用施設「堆肥センター」もあり、水稲栽培や果樹栽培などに活用され、環境保全にも役立っています。



●加工体験
 豊田町産の食材を使って、そば打ち・豆腐づくり・味噌づくり・郷土料理づくり・菓子づくりを体験できます。学校の体験学習にも活用されています。

たのしく、
 おいしく。



●農作業体験
 農業公園内の水田を使って田植えや稲刈り、そばの栽培、大豆栽培などが体験できます。



●果樹園
 2.7haで梨・ブドウ・リンゴ・プラムなどを栽培。梨やブドウのもぎ取り体験もできます。

豊田町は瀬戸内海に注ぐ木屋川と日本海に注ぐ粟野川の2つの河川に沿って集落が散在し、肥沃な水田地帯が広がる農業の盛んなまちです。梨の産地としても有名で、豊田町では農家などと連携しながら新鮮で安全な農産物の生産、農産加工品の開発を進め、それらを地元で販売する「地産・地消」によって農家の所得向上と農業の活性化を図ろうと農業振興に力を入れています。そんな中「農業の最大の喜びである『実り』の実体験を中心に、都市と農村が交流しながら『実り』ある時間を過ごせる場づくり」を目指して平成8年度から「豊田町農業公園・みのりの丘」の整備が始まり、

現在までに食堂・特産品販売所・加工体験施設・温室ハウス・果樹園など11施設が誕生しています。

みのりの丘が担っているのは、交流拠点としての役割だけではなく、その運営を、農林作業の受託などを行う組織として設立された有限会社豊田あくりサービスが行っていることもあり、農作業の受託のほか、新規就農者育成・研修の場、農業情報の発信の場としての役割も担っています。

そうした地域農業の拠点として注目されるのは、環境への配慮やエネルギー削減の面から今注目を集めている、中国国で初の導入事例となった太陽熱×火力乾燥方式



●温室ハウス
 養液栽培のサラダホウレンソウ、養液土耕栽培のトマトのほか、イチゴ・サクランボ・ブルーベリーなどを栽培。もぎ取り体験もできます。

もぎたたって
 おいしいね!

ホテルと温泉のまち、豊田町。その自然豊かな環境をいかして、平成8年度から「豊田町農業公園・みのりの丘」の整備が進められています。どんな農業公園を目指して誕生したのか、どんな交流拠点として活用されているのか、ご紹介します。

のんた Photo Column vol.6

Nonta



一粒の種から、一本の苗から
自然の恵みをたっぷり受けた
豊かな実りを生みだそう。

それはかけがえのない私たちの支え、
生命の源。

野や山を、小川のせせらぎを
かつてそうであったように
草花や木々、生き物たちで満たそう。

子らの人生がもっと豊かになるように。

太陽や水や風や土にはぐくまれた
生命に満ちた地球。
その未来を創っていくのは私たち一人ひとり。

発行

食料・環境・ふるさとを考える

山口県地球人会議 事務局

〒753-0079 山口県山口市糸米2丁目13番35号 山口県土地改良事業団体連合会内
TEL083-933-0033 FAX083-933-0048